

新型インフルはどのように語られたのか

成城大学 川上 善郎
東京経済大学 川浦 康至

キーワード：新型インフル、パンデミック、会話、話題、テキストマイニング

はじめに

WHO（世界保健機構）は2005年11月に、「世界インフルエンザ事前対策計画（global influenza preparedness plan）」を発表した。これは、新型インフルエンザ（以下新型インフルと略す）が世界的規模で爆発的な流行を起こす可能性を警告し、その対策の必要を訴えたものである。新型インフルが人から人へと感染し、多数の死者を伴って地球規模でひろがる状態をパンデミックとよび、それにいたるプロセスを6段階（注1）として表示した。2005年時はすでにフェーズ3の段階にあり、いつでも人から人への感染に変化する可能性があり、さらに世界的な流行であるパンデミック期になってもおかしくない指摘したのである。

しかしパンデミックがいつ起きてもおかしくないというWHOの指摘は、一部の関係者を除いてそれほど深刻なものとしては受け取られていなかった。実際には、2004年以降鳥インフル騒動が幾度か発生したが、いずれも小規模なものであり、動物から人間への感染という事態にはいたらずに収束していた。その結果、それほど深刻に受け止められなかったのであろう。

このような状況の中で、2008年1月に、NHKテレビは2晩連続で史上最強ウィルスの特集を組んだ。最初の晩は「感染爆発～パンデミック・フルー」というドラマであった。日本海の寒村で発生した人から人へ感染する新型ウィルス（鳥インフルを想定）の封じ込めに失敗し、急速なスピードで東京中に広がり、数万人の死者が発生する様子を描いたものである。2晩目は、各種調査データなどにもとづき、パンデミックへの警鐘を鳴らす科学情報番組であった。

それから1年後の2009年1月には、政府は

新型インフル流行による想定死者数64万人を上方修正することに決定し、新型インフルの脅威がこれまでの想定以上に重大なものであるという認識を発表し、1月13日には、新型インフルエンザ対応総合訓練を実施した。

さらに、同年2月17日には、海外での新型インフルエンザの国内侵入を完全に防ぐことはほぼ不可能という立場から新しく新型インフル対策行動計画を発表した。

しかしながら、2009年初頭の政府の動きにもかかわらず、新型インフル問題は、一般の人々にとっては漠然とした不安を感じさせるものの、具体的に対処する問題ではなかった。

調査時点までの新型インフルをめぐる状況

4月25日になって突然「豚インフルが人感染か 60人死亡 800件に疑い／メキシコ」（読売新聞2009.04.25朝刊）というニュースが報道される。想定されていた「鳥インフル」ではなく「豚インフル」となじみのない新型インフルであり、すでに動物から人への感染段階に入り、しかも多数の死者も発生しているというのである。このニュースによって、新型インフルへの恐怖は一挙に現実化したのである。

4月28日WHOはメキシコで発症した「豚インフル」を人から人に感染する新型インフルと認定。4月30日には、アメリカにおいてもすでに数百人が感染していることが報道される。メキシコ、アメリカでの流行をうけて、WHOは警戒レベルをフェーズ4にあげ、それにともないわが国政府も対策本部設置、アメリカ、カナダからの航空機に対して機内検疫が実施される。

4月の月末を境にマスコミ報道は一気に新型インフルの恐怖を伝えるものになった。1月以降毎月4件から9件程度であった記事が、5月

には記事の見出しに「新型インフル」と書かれているものだけで、じつに681件と爆発的にふえていったのである（注2）。

5月に入り、WHOはパンデミック一歩前であるフェーズ5にひきあげた。この時点で20ヶ国985人が感染（WHO）と発表され、そのわずか3日後には感染者2485人、24カ国へと急速な広がりを示したのである。

そのような中で、5月1日にはカナダ修学旅行から帰国した横浜の高校生が国内初の新型インフル感染かと騒がれたものの新型ではないことが判明した。しかし、5月9日には海外帰国者で大阪府内の男性3人が国内初の新型インフル感染と確認され、さらに、同じ飛行機に乗っていた高校生数人も隔離されていたが、新型のインフルに感染していることが明らかになった。新型インフルが確認されると、その周辺で接触したものは「濃厚感染者」として一定期間「停留」措置が加えられた結果、次のような事態が現出したのである。

「新型インフルエンザで、国内初の感染が確認された高校生ら4人に対する「隔離」と、周囲にいた人たち48人の「停留」措置が、15日夕から次々と解かれる。これまでの厳しい行動制限がなくなり、日常生活が可能になる。だが、生徒らの高校がある大阪府寝屋川市などには、誤解にもとづく誹謗（ひぼう）や中傷が殺到」（産経新聞5月14日）と報道された。この報道にみられるように、一般の人々の新型インフルに対する恐怖心、警戒心は非常に強いものになっていたことがうかがえるだろう。

その上、新型インフル感染者は海外からの帰国者に限られていたが、5月17日には、海外帰国者ではなく、国内での感染者が神戸市に発生してしまった。翌18日には兵庫県立高校2校の生徒8人に感染確認、大阪の女子高生も集団感染したことが報じられた。19日には、国内感染者は130人を越すと発表される。このように、関西を中心に感染が爆発的に拡大している様子が報道され、その影響は、関西方面への修学旅行の中止を決定する高校が2000校をこえるなど広範囲に及んだのである。

本研究が報告しようとする調査は、5月25

日（月）から5月29日（金）の間に実施された。すでに述べたように、調査実査時期は、新型インフルが関西において爆発的に拡大している最中であった。いまだ、今回の新型インフルの毒性がいかなるものか、感染がどこまで広がるのか、どの程度の死者がでるのか、まったく未知の状態であったといえる。その一方で関西地区以外では、いつ新型インフルが自分たちの地域に侵入し、どのように拡大するのかという不安に満ちた状況にあったのである。

なお、調査終了後の6月には新型インフルが関西地区に限定されていたものが、全国化し東京、千葉、静岡においても感染が確認された。さらに6月13日には、WHOがパンデミック宣言を出し、新型インフルのフェーズ6にとうとう突入したのであった。

本研究の目的

本研究の第一の目的は、上に述べたような未曾有な危機的状況の中で、新型インフルに対し人々がどのように行動し、どのような不安を感じたのか、どのようなものとしてとらえていたのか等を社会調査という手法によって記録にとどめておくことにある。本報告を執筆している2009年12月の段階では、今回の新型インフルは、当初予想されたような強毒性のものでないとされ、感染力の速さ、強さは別として、季節性インフルと大差がないものとして位置づけられている。しかし、調査時点では、政府の立てた行動計画が示すように本格的に流行した場合には死者数が64万人以上の大災害の可能性があるものとして想定されていたのである。そのような状況の中で、人々はどのように新型インフルをとらえ、新型インフルにどのように対処し、どのような情報を必要とし、新型インフルについて流布している情報をどのように評価するのかを社会調査によって記録することは、この時点でしかなしえないことであった。そのような意味で、貴重な資料となると考え緊急に調査を実施したのである。

本研究の第二の目的は、社会的不安の発生時における人々が行う語り（うわさなど）についての実証的なデータを収集することにおいた。

新型インフルという体験のない事態に直面して、身近な人々とどのような内容の会話が交わされたのか。どのようなうわさが話されたのかを記録し分析することである。これまでに「うわさとニュースの研究会」は、突発的なニュースの発生時におけるニュースの伝播研究（注3）や、社会的な不安状況下でのさまざまな言説の発生、とりわけうわさの発生についての研究（注4）を実施している。

方法

手続きと対象者

調査は2009年5月25日（月）から29日（金）の5日間に、授業時を用いた集合調査により実施された。実施大学は、以下の3地区13大学である。

北海道地区：札幌大学、北海学園大学

関東地区：川村学園女子大学、成城大学、東京学芸大学、東京経済大学

関西地区：大阪大学、大阪国際大学、大阪人間科学大学、関西学院大学、神戸学院大学、神戸女学院大学、帝塚山大学

有効回答は898票で、回答者の内訳は男性375票(41.8%)、女性523票(58.2%)であった。学年別では1年生21.8%、2年生27.8%、3年生32.6%、4年生以上13.7%、大学院生4.0%であった。

主な設問

新型インフル流行への関心度、予防策の実施状況、インフル罹患可能性、インフル知識程度、関連情報の入手経路、情報源の信頼度、推定感染者数、沈静時期の見通し、報道に対する評価、

各種リスクに対する恐怖度、インフルに対する社会的態度、インフル流行について知りたいこと・気になること（自由記述）、インフルに関するおしゃべりやうわさ（自由記述）、フェースシートから構成した。付録に調査項目と地域別の単純集計表を添付した。

分析

本報告は、2つの分析からなる（注5）。分析1は、新型インフル流行に直面して、人々が新型インフルを他者に語る背景を分析するものである。どのような要因が人々を新型インフルについて語らせたのかを分析するものである。分析1は、社会調査データを多変量解析によって分析した。分析2は、人々が新型インフルの何について語ったのかを分析する。語られた内容が、新型インフル流行への切迫度の違い（地域）、新型インフル流行への関心の違い、さらには、マスコミへの態度の違いによってどのように語りの内容が変わるのかを分析する。分析2は、自由記述データを用いた内容分析による。

分析1

分析1では、何が新型インフルエンザのニュース価値（設問は「自分から新型インフルを話の話題にしたか」）を規定しているのか、その要因について検討する。ここで取り上げる要因は、次のとおりである。

回答者の居住地（当時「発生源」とみなされ、感染ニュース発生地である関西からの距離）と性別、新型インフル流行への関心度、関連情報の入手経路数、インフルに対する社会的態度（因子）。

表1 新型インフルを話題にしたか（地区別）

地区 (関西からの距離)	新型インフルを		全体
	話題にした	していない	
関西 (1)	333 ▲	146 ▽	479
関東 (2)	168	102	270
北海道 (3)	66 ▽	83 ▲	149
全体	567	331	898

$\chi^2(2)=31.210^{**}$ 残差分析：▲有意に多い、▽有意に少ない (p<.05)

結果

まず、地域との関連から見ていく。

新型インフルエンザの感染が最初に報じられた、「震源地」ともいふべき関西では「話題にした」人が有意に多く、最も離れている北海道では「話題にしていない」人が有意に多い(表1)。関東は話題の有無について全体の分布と変わらないことから、関西から離れるにつれ、

つまり、関西(69.5%)、関東(62.2%)、北海道(44.3%)の順で、新型インフルを話題にした人は少なくなっている(図1)。

次に性別との関連を見てみよう。表2のように、女性の方が新型インフルを話題にしている人は多い。この背景として、一般に女性の方が、対人コミュニケーションが活発であること

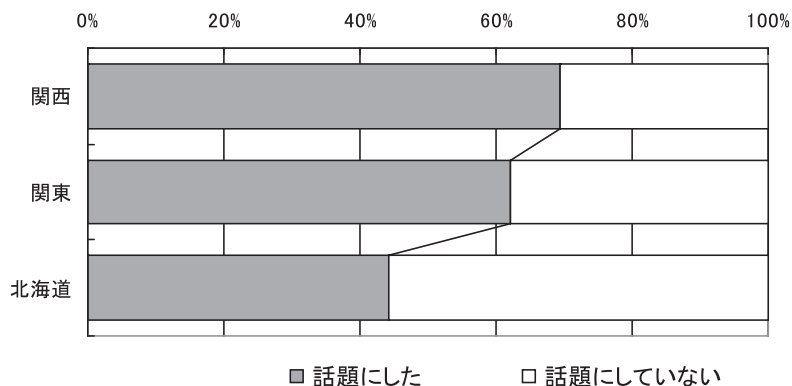


図1 新型インフルを話題にしたか(地区別)

表2 新型インフルを話題にしたか(性別)

性別	新型インフルを		全体
	話題にした	していない	
男性	202	173	375
女性	365	158	523
全体	567	331	898

直接確率計算 p=.000

表3 新型インフルを話題にしたか(流行への関心)

新型インフル流行	新型インフルを		全体
	話題にした	していない	
関心がない (1)	21 ▽	38 ▲	59
(2)	52 ▽	59 ▲	111
(3)	128	72	200
(4)	238 ▲	102 ▽	340
関心がある (5)	127	59	186
全体	566	330	896

$\chi^2(4)=40.961^{**}$ 残差分析: ▲有意に多い、▽有意に少ない (p<.05)

(Tannen, 1994)に加え、健康への関心が強いこと（滋賀県健康福祉部, 2001; 上田・小島・山本, 2008）が考えられる。

新型インフルの流行に対する関心度との間では、表3にかかげるように、関心の低い人（同表の1と2）ほど「話題にしていない」人が多い。他方、関心度が4と高い人たちの間では「話題にした」人が多い。話題の有無による関心度の平均値は、「話題にした」3.70、「話題にしていない」3.26と差自体は僅かであるが、t検定の結果は有意であった（ $t=5.249$, $df=582.65$, $p=.000$ ）。

新型インフルに関する情報をどこから得たか、

表4 新型インフルを話題にしたか（情報チャンネル数）

情報チャンネル数	新型インフルを		全体
	話題にした	していない	
0	7 ▽	14 ▲	21
1	214 ▽	156 ▲	370
2	253 ▲	121 ▽	374
3	77	38	115
4	16 ▲	2 ▽	18
全体	567	331	898

$\chi^2(4)=21.598^{**}$ 残差分析：▲有意に多い、▽有意に少ない（ $p<.05$ ）

表5 新型インフルへの社会的態度に関する主成分分析（バリマックス回転解）

	因子				共通性
	1	2	3	4	
1 国は新型インフルに関する情報を操作している	.802	.052	.095	.023	.655
2 関東でも新型インフルの患者がいるのに公表していない	.731	.217	.110	.026	.594
3 近いうちに東京でも新型インフルが大流行する	.048	.761	.044	.211	.628
4 新型インフルは近いうちに強毒性に変わる	.173	.680	-.084	-.014	.500
5 大学の臨時休校はあわてすぎである	.083	-.235	.708	.207	.606
6 新型インフルの水際作戦は意味がない	.323	.169	.553	.048	.441
7 今の抗インフル薬は新型インフルにも効果がある	-.280	.316	.553	-.376	.625
8 新型インフルにはマスクは効果がない	.414	-.097	.453	.048	.388
9 新型インフルについてはわからないことがとても多い	.039	-.006	.045	.804	.650
10 新型インフルが大阪と神戸だけで流行するのは不思議だ	-.008	.338	.111	.585	.469
固有値	1.573	1.399	1.363	1.223	5.557

新型インフルに対する社会的態度を10項目でたずねた（表5の左欄）。それらに主成分分析を適用したところ、つぎのような4因子—行政側の「情報操作」に関する因子、新型インフルの「流行爆発」に関する因子、感染対策への「疑問」に関する因子、新型インフルの「未知性」に関する因子—が抽出された。ついで、各因子得点について、話題にしたか否かでそれらの平均を比較したところ、因子2「流行爆発」（「話題にした」群0.083、「していない」群-0.142）でのみ有意な差が見出された（ $t=-3.239$, $df=875$, $p=.001$ ）。

最後に、これまで見てきたいくつかの要因の全体的影響力を検討するため、これらを説明変数とし、新型インフルを話題にしたか否かを目的変数とする二項ロジスティック回帰分析を行った。

その結果（表6）、関西からの距離が小さいほど、新型インフルへの関心度が高いほど、女性で

あること、関連情報の入手チャンネル数が多いほど、新型インフルを話題にする傾向が高まる。また、インフル態度因子3（疑問）の高さが有意傾向であった（他の3因子はいずれも有意確率が高く、それらを除外した分析結果である）。今回、ニュース価値については、インフルを話題にしたか否か（した、していない）と二者択一でたずねる形式をとっていない。つまり、回答者には、新型インフルに関してとった行為を、「話題にした」を含む複数選択肢から選んでもらった（詳細は付録を参照されたい）。つまり、表7の「していない」は現実には存在しない便宜上の表現である。そのため、モデルの精度は「した」については87.5%と満足できる数値ではあるのに対し、「していない」については29.8%と低いレベルにとどまっている（表7）。

以上、新型インフルエンザ感染のニュース価値を検討してきた。具体的には、感染・流行を話題にしたか否かを指標に、それに影響を与え

表6 「新型インフルを話題にしたか」を従属変数とする二項ロジスティック回帰分析

従属変数 新型インフルを話題にしたか (1:していない、2:した:)	β	標準誤差	Wald	Df	p	Exp(β)
地区（関西からの距離：1—3）	-.404	.098	16.894	1	.000	.667
流行への関心（1:ない—5:ある）	.295	.067	19.616	1	.000	1.343
性別（1:男性、2:女性）	.578	.149	15.060	1	.000	1.782
情報チャンネル数（0—4）	.213	.098	4.686	1	.030	1.237
インフル態度因子3（疑問）得点	.144	.076	3.637	1	.057	1.155
定数	-1.078	.399	7.288	1	.007	.340

-2 対数尤度=1070.840、Cox & Snell $R^2=.088$ 、Nagelkerke $R^2=.120$

表7 「新型インフルを話題にしたか」に関する二項ロジスティック回帰分析の精度

実測値（話題に）	予測値（話題に）		的中率
	1 していない	2 した	
1 していない	96	226	29.8
2 した	69	484	87.5
全体			66.3

そんな複数の変数を個別にとりあげて検討するとともに、全体的な検討も行なった。その結果、回答者の性別を除くと、ニュース発生源に近い場所にいること、当該事象に関心の強いこと、関連情報入手経路が多いこと、ニュース内容に疑問的態度をいっていることが、ニュース価値に影響を与えていた。

分析 2

分析 2 は、人々が新型インフルについてどのような内容を語ったのかを分析する。「あなたは、新型インフル（の流行）について友人など身近な人とどのような話やうわさをしていますか。その内容をできるだけ詳しく書いてください」という設問に対する自由記述を分析する。

あわせて、対象者の地域、すなわち流行の渦中の地域（関西地区）、流行が近々広がってくると予想される地域（関東）、流行からもっとも遠い地域（北海道）によって、話される内容がどのように異なるか。同様に、新型インフルの流行への関心の強さ、分析 1 でとりあげた「新型インフルを自分から話題にしたか」どうか、さらに、「マスメディアの報道に対する態度」によって語りの内容がどのように異なるのかを分析した。

分析方法

1. 分析対象

分析に用いた自由記述は、無記入者 247 人を除き、651 人であった。また分析対象となった文の数は、1882 文であった。平均ひとりあたり 2.89 文である。

2. 分析ソフト

自由記述を処理するソフトは、立命館大学樋口耕一氏が開発したものである KH Coder を用いた。このソフトは「内容分析（計量テキスト分析）もしくはテキストマイニングのためのフリーソフトウェア。新聞記事、質問紙調査における自由回答項目、インタビュー記録など、社会調査によって得られる様々な日本語テキスト型データを計量的に分析するために製作」（樋口、2008）されたものである。

3. 分析の準備

自由記述データを KH Coder によって分析するために、あらかじめ回答をデジタル化し、その際に半角文字をすべて全角に変換した。一人分のデータを一単位とし、調査票に付した ID を見出しとし HTML タグでくくった。なお無記入回答については、「無記入」と記入した。このようにして分析対象ファイルを作成し、KH Coder にかける。形式的な入力ミスのチェック後に、前処理の実行を行い、その後、1. 「複合語の検出」（注 6）、2. 「抽出語リスト」（注 7）コマンドを実施する。これらから、複合語として定義すべき単語、辞書に登録されていない「未知語」のチェックを行う。それらの語を分析に利用するためにはオリジナルな辞書に登録されていないので、「強制抽出」する必要がある。また同時に「使用しない語」もこの段階で指定できる。

タグとして登録したものは、次の 18 語であった。「タミフル」「インフルエンザ」「就活」「リレンザ」「キメラ型」「強毒性」「弱毒性」「パンデミック」「インフル」「うがい」「うわさ」「完治」「感染者」「感染経路」「無記入」（注 8）「予防策」「予防法」「気に」（注 9）であった。

以上の事前準備をしたうえで分析のための前処理に入る。前処理の段階で、利用する品詞は、「名詞」「サ変名詞」「形容動詞」「副詞可能」「タグ」「動詞」「形容詞」「副詞」とした。

4. 分析方法

自由記述で出現した語の相互の関係を分析するために、出現頻度の高い語について、共起関係（同じ文章に同時に登場する確率）から階層的クラスタ分析（ward 法）を実施し、 dendrogram を作成した。作成に当たっては出現頻度が 8 以上の語のみを用いた。

つぎに、以下の 4 変数について、社会調査データにおけるクロス集計にあたる対応分析を実施する。分析に用いた変数は、1. 対象者の地域、2. 新型インフルの流行に対する関心度（問 1）、3. 新型インフルについて自分から話題にしたか（問 7）、4. 新聞やテレビの報道を騒ぎすぎたと思うか（問 10）の 4 変数であった。

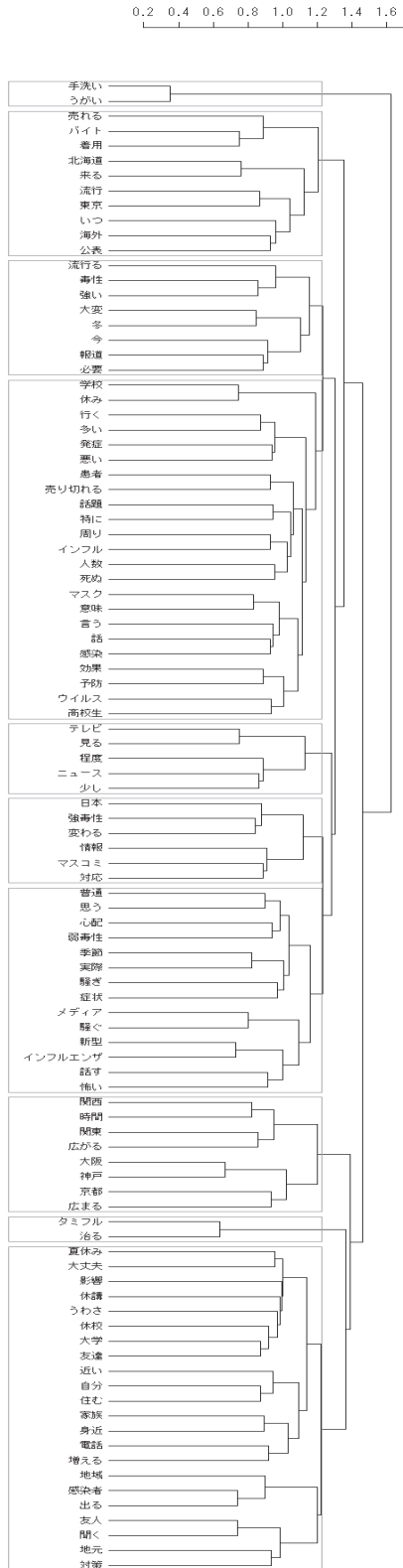


図2 階層的クラスタ分析結果 (Ward法による)

結果

最初に、対象者全体の自由記述に関する分析結果から述べる。図2は、クラスタ分析を行い、デンドログラムとして表示したものである。デンドログラムにもとづいて今回の自由記述全体の言葉の構造について述べる。

図2は、階層的クラスタ分析結果に基づいて作成されたデンドログラムである。出現パターンの似通った語同士がグループを作っている。図より、大きく10の群に分けて解釈を行った。以下群ごとに、共起して出現する語を示し、あわせて実際の自由記述を例文としてあげる。

I 群 予防策についての話題 (うがい+手洗い)

「うがい」と「手洗い」についての言及が独立してみられた。実際の例をあげると、「マスクの効果は期待できず、それよりも手洗い・うがい・栄養・睡眠の方が大事 (id=696) (注10)」などである。新型インフルに対する対処策として、当初はマスクの効果は喧伝され、マスクの売り切れ騒動などが存在した。しかし、時間がたつに従って「手洗い・うがい」が効果的であるとされた。「うがい」という言葉と「手洗い」という言葉が同時に使われるケースが多かったことを示す。

II 群 広がっていく新型インフルの影響についての話題

II-1 バイトでのマスク着用 (売れる+着用+バイト)

「メディアが騒ぎすぎてバカバカしい、踊らされてマスクが急激に売れて、いつぞやのトイレトペーパーの時のような暴動が起こるのを恐れ、『マスクはそんなに効果ない』などかなり時が経ってから公表するところとか情けない。バイト先でマスク着用を義務づけられているが、逆に肌トラブルが起きたり、酸欠や頭痛に悩まされている。いつまでつければいいのか (id=4049)」

II-2 新型インフルの流行 (流行+東京+北海道+来る、いつ+海外+公表)

「東京でも流行して北海道にも来ると思う。」

でももうこないと思う(id=9133)」

Ⅲ群 新型インフルの毒性に関する話題

この群は、新型インフルの毒性をめぐる話題である。新型インフルの毒性をめぐる話題はメディアを騒がせた。

Ⅲ-1 (強い+毒性+流行る)

「いったん静まって7月に毒性が強くなってまた流行るとききました (id=7036)」

Ⅲ-2 (今+報道+必要)

「新型インフルエンザが弱毒性のうちに、多くの人がかかって抗体を作っておけば、強毒になった時にも免疫になるのではないか。したがって、今の過剰な報道は必要性がないように思える(id=9122)」

Ⅲ-3 (冬+大変)

「今も大変だけど、今年の冬の方がもっと大変そうでこわい(id=7031)」

Ⅳ群 新型インフルへの社会や人々の対応に対する批判的な話題

この群には多くの言葉が分類された。全体の傾向を分析すると、新型インフルに対する学校や行政などの対応に対する批判、あるいは、マスクが売り切れてしまっていることへの批判、さらには、高校生たちが休校とって遊び回っていることへの批判など多様な対応にたいする批判的な視点である。

Ⅳ-1 (学校+休み)

「新型インフルエンザで大阪や神戸の学校をすべて休みにしましたが本当それをしなればいけなかったのか(id=9027)」

Ⅳ-2 (行く+多い +発症+悪い)

「インフルにかかっている、病院に行かない人が多いだろう(騒がれるから) (id=8067)」

Ⅳ-3 (患者+売り切れる)

「新型インフルエンザの患者の数はもつというだろう。普通の季節型インフルエンザと判断された人もいるのでは。マスクがインフルエンザが流行していない地域でも売り切れている。誰もつけてはいないのに(id=6041)」

Ⅳ-4 (話題+特に)

「特に話題にはしていない(id=3192)」

(周り+インフル)

「テレビは騒ぎすぎ、インフルになるのはいけど差別的な目で周りで見られるのがいや(id=8034)」

(人数+死ぬ)

「初期の方は大人数の方が死んでいたのどうなってしまうかと、日本に来たらどうするか言っていました、最近は全く話しません(id=4202)」

Ⅳ-5 (マスク+意味、効果+予防、言う、話+感染)

「友人が先週、休講になるかもという話をしていました。あと、市販のマスクの8割は意味がないという話を知り合いの方から聞いて不安になりました。さらに、梅雨の時期に沈静化した後、秋に強毒になって戻ってくるというものも聞いたので怖くなりました。母も大騒ぎしてマスクを送ってきました(id=1086)」

(ウイルス+高校生)

「神戸・大阪の高校生は自分にウイルスが潜伏しているかもしれないのに外をうろついて自覚がなさすぎる」とおじさんがなげいていた(id=7006)」

V群 テレビニュースを見ての話題

V-1 (テレビ+見る)

「家族とテレビを見て「怖いよね」という話(id=9135)」

V-2 (ニュース+少し+程度)

「テレビのニュースで放送されている事を少し話す程度(id=3030)」

Ⅵ群 新型インフルに関する予想についての話題

Ⅵ-1 (強毒性+変わる+日本)

「これから日本中に広まっていくのではないかという予想や、新型インフルエンザが鳥インフルエンザ並みの強毒性に変わってしまったらどれぐらいの人が死ぬのかといった話をしています (id=7054)」

Ⅵ-2 (マスコミ+対応+情報)

「「マスコミは嘘も流すから信用ならん」がほとんど。私もそう思う。専門家の意見を当て

にする。実際マスクの効果も誤報していたはずだ(id=7125)」

Ⅶ群 新型インフルの毒性に関する話題

Ⅶ-1 (普通+思う+心配+弱毒性、季節+実際+騒ぎ+症状)

「マスクをしている人たちが増えてとても滑稽に見える。たとえマスクをしていても横のすき間も空いているものだとあまり意味がない。弱毒性のうち普通のインフルエンザより致死率が低いのに、テレビや政府が国民を煽りすぎていると思う。私たち国民もその煽りをまともに受け取りすぎている。それよりも季節性インフルエンザや鳥インフルエンザの方が怖い。感染者数でも日本は上位に躍り出たが、それは国民がすぐに病院に行くからであって、実際は他国も相当数の感染者がいると思う (id=2055)」

Ⅶ-2 (メディア+騒ぐ、新型+インフルエンザ、話す+怖い)

「メディアではものすごく話題にしている、どれだけ新型インフルエンザが怖いものなのかをどの番組でも、どの新聞でもとりあげているが、実際に感染しても死ぬことはなく、そこまでメディアが騒ぎたてるほどの大きな問題ではないということを話しています。感染はだれもわるいわけではないのに、感染した高校生の担任や校長先生はひどくせめられていてメディアへの怒りをこみあげたりしていました (id=1059)」

Ⅷ群 地域的な広がりに関する話題(関西+時間、関東+広がる、大阪+神戸、京都+広まる)

「関西までできてるし、地元がの中学が、修学旅行で大阪と京都、奈良に行ってるから、関東に広がるのも時間の問題(id=3028)」

「11月中には日本全土に新型インフルがまわる。関西の人が他の地域に旅行に行くと嫌がられるのではないかと(id=7051)」

「いくら水際対策をしても、関東で流行するのは、時間の問題ではないか。関西の学校で休校の措置をとっているが、休校の学生が東京に遊びに来たりしているのだから、休校の意味がないのではないかと。いくら自分がインフル対策をしても、なる時はなってしまうので、そんなに神経

質にならなくても良いのではないかと(id=3040)」

Ⅸ群 タミフルは効果があるかという話題(タミフル+治る)

「今はタミフルを飲めば治るけど、ウイルスも進化するのでそうなったときどうなるのかなという話をよくする(id=8019)」

X群 大学生活への影響に関する話題

X-1 (夏休み+大丈夫、大学+友達 +休校+うわさ +休講 +影響)

「もし、東京または大学内に感染者が出たら、休校になるが、夏休みがその分減ってしまうといううわさ (id=5011)」

「豚インフルの影響で休校なんかになったら、1年のスケジュールがすべて崩れてしまうこと。他の大学に通っている友達は、豚インフルの影響で課外活動などが中止になったりしていること。プロ野球はどうなるのかということ。ライブやコンサートはどうなるのかということ(id=1021)」

X-2 (自分+住む +近い)

「マスクが息苦しい、マスクの値段が上がっている、あきらかにふつうのかぜなのに病院に行きづらい。自分の住んでいる近くに感染者が出たといううわさ、休校で下宿している子は実家へ帰っているという話 (id=7021)」

X-3 (家族+身近 +電話+増える)

「大阪や神戸で感染者が増え始めた時に、家族から電話で、マスクは確保できているか、ないのなら実家から大阪に住んでいる私の方へ送ろうか、という話を1回しました(id=8075)」

X-4 (感染者+出る +地域、友人+聞く +地元+情報)

「川崎市に感染者が出たときに、親から電話があったり、地元の友達と電話をすると、大丈夫かどうか聞かれたりした。他大の友達と自分の大学についてはどうかを聞いたりしている。ワクチンが7月くらいにできる(id=1088)」

「同じ大学に通っている友達に、大学内での感染者はいないかを確認したり、近場の大学で感染している人がいないかを、情報交換したりしていた(id=7055)」

以上が、自由記述に述べられた話題を、一定数以上出現した語同士の共起関係を基にしたクラスター分析結果の解釈である。このような方法によって新型インフルについての話題の大枠を整理することができたといえよう。

[対応分析]

次に外部変数との関係について対応分析を行った結果について述べる。前節での分析は全体的傾向であるとする、対応分析は、「質問紙の他の項目と抽出語のクロス集計を行い、それらをもとに分析することで、その項目のカテゴリーの違いによって、語の使われ方の違いや、逆に、どのカテゴリーが類似していたかを分析することができる」(樋口p48-49) というものである。要するに、回答者の属性ごとに、語られた話題

の違いを抽出できるということである。ここでは、外部変数として4つの変数を取り上げて分析する。

1. 流行地域、流行予期地域と非流行地域での話題の構造

すでに述べたように、最初に回答者を調査地域に分類し対応分析をおこなった。各群を特徴づける抽出語を上位20位までを表8に示す。表は紙数の関係で上位20位までを示した。

調査時点で流行の渦中にあった関西地区では、「インフルエンザ」「インフル」の「感染」が話題になり、「マスク」による「予防」が「意味」があるのかどうか語られ、どうして「神戸」に感染者が「多い」のか「流行」「地域」になっ

表8 流行地域を特徴づける抽出語（上位20位）

地域	1. 関東	Jaccard	2. 北海道	Jaccard	3. 関西	Jaccard
1	休校	0.0819	特に	0.0791	マスク	0.1874
2	感染者	0.0769	北海道	0.0738	感染	0.0936
3	インフルエンザ	0.0745	来る	0.0563	インフルエンザ	0.0840
4	話	0.0743	話す	0.0435	話	0.0838
5	出る	0.0667	思う	0.0337	出る	0.0559
6	話す	0.0539	いつ	0.0314	新型	0.0542
7	関東	0.0513	日本	0.0307	騒ぐ	0.0522
8	東京	0.0505	自分	0.0294	インフル	0.0489
9	学校	0.0414	話題	0.025	意味	0.0450
10	休講	0.0399	今	0.0244	思う	0.0447
11	地元	0.0399	売れる	0.0196	地域	0.0431
12	大学	0.0396	増える	0.0195	流行	0.0429
13	言う	0.0377	ニュース	0.0186	騒ぎ	0.0413
14	友達	0.0361	扱い	0.0134	言う	0.0407
15	怖い	0.0321	アメリカ	0.0134	予防	0.0389
16	大阪	0.0320	爆発	0.0134	学校	0.0386
17	うわさ	0.0317	上陸	0.0134	神戸	0.0331
18	自分	0.0314	アルバイト	0.0133	多い	0.0328
19	友人	0.0290	感じ	0.0133	効果	0.0309
20	うがい	0.0287	メキシコ	0.0133	行く	0.0267

たのかが語られ、同時に「騒ぐ」「騒ぎ」すぎであると語られているのである。

他方、関東地区では、関西での休校騒ぎを受けて、「休校」「学校」「大学」「休講」など、新型インフルの「感染者」がでることで、大学が休みになるのではということが話題として語られていたことが分かる。また「大阪」「関東」「地元」などインフルエンザの伝播に関して語られ、そのことを「怖い」と「うわさ」する様子が浮かぶ。

もっとも感染地区から離れている北海道では、「北海道」に「いつ」「来る」のか、こないのか

が話題になっていること、「アメリカ」「メキシコ」など海外の話題があがっているように、自分の問題から離れた世界に向けられている様子がうかがえる。要するにまだまだニュースの話題として語られているのである。

また、図3は抽出語が作りあげる二次元の言語空間であるが、「1.関東」は第一象限に、「3.関西」は、第4象限に、そして「2.北海道」は第1軸マイナス側に位置する。図中の数字が地域の位置を示している。流行から遠い地域と、現在流行している関西、流行は必至と考えられ

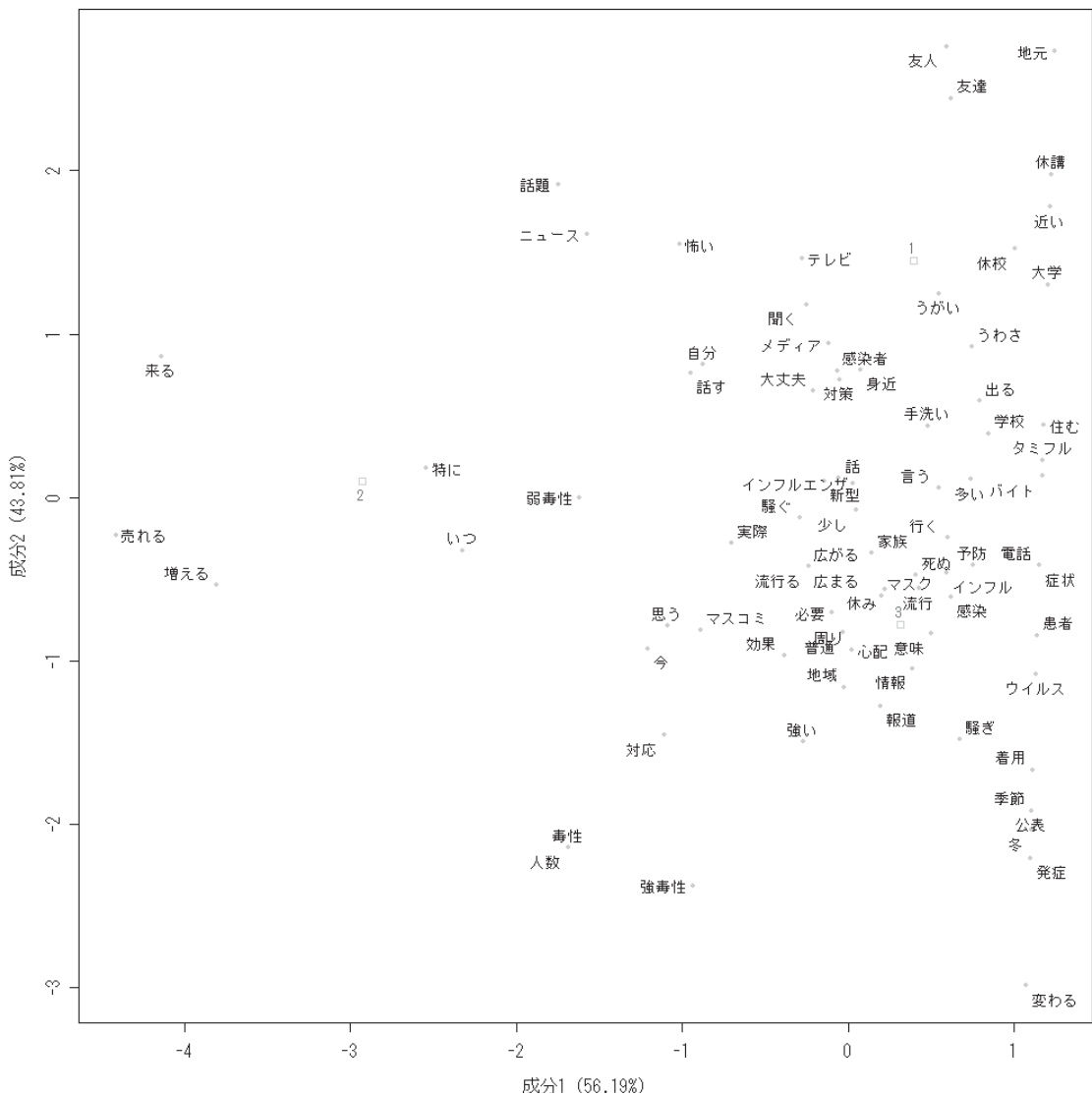


図3 流行地域による対応分析結果

ていた関東とで、語られるパターンが大きく違うことが読み取れよう。

現在流行している地域では、上に述べたような事柄のほかにインフルエンザの毒性の変化、とりわけ強毒性への変化が、また季節インフルとの関係、報道の騒ぎすぎ、関係機関の情報の公開などに神経質になっていることが示される。他方、関東地区に関しては、表8に述べたことが中心になっていること、さらに北海道については、他人事というか、客観的な立場での発言が多くみられるのである。

心の強さの関係に関しては、分析1で詳しくふれており、関西地区は関心が高く、ついで関東とつづき、北海道は低いことが確かめられている。しかし、ここでは、地域性を考慮せずに、新型インフルの流行に関する関心の程度によって「1. 新型インフル流行に関心がない」「2. まあ関心がある」「3. 関心がある」の三群にわけ、抽出語の出現パターンを分析した。各群を特徴づける抽出語を表9に示す。また、図4に、新型インフル流行に対する関心の強さによる対応分析の結果を示す。

2. 新型インフルの流行に対する関心の強さによる分類

新型インフルに対する関心の強さには個人差が大きい。すでに議論した対象者の居住地域によっても関心の強さは異なっている。地域と関

新型インフルに「1. 関心のない」ものの発言を特徴づけるのは、「騒ぐ」「特に」「騒ぎ」「話」などに示されるように新型インフルに関して「メディア」「マスコミ」「テレビ」を含めて、騒ぎすぎであるという点である。「言う」

表9 新型インフルの流行への関心の特徴づける抽出語（上位20位）

Q1	1. 関心ない	Jaccard	2. まあ関心	Jaccard	3. 関心ある	Jaccard
1	話	0.0823	マスク	0.1614	インフルエンザ	0.0917
2	騒ぐ	0.0641	感染者	0.0973	感染	0.0847
3	特に	0.0537	休校	0.0516	出る	0.0631
4	新型	0.0479	話す	0.0464	新型	0.0594
5	言う	0.0413	流行	0.0451	思う	0.0474
6	騒ぎ	0.0395	インフル	0.0444	自分	0.0443
7	インフル	0.0384	予防	0.0425	話す	0.0409
8	意味	0.0361	学校	0.0391	身近	0.0370
9	自分	0.0313	意味	0.0362	大阪	0.0352
10	普通	0.0292	地域	0.0336	神戸	0.0352
11	メディア	0.0267	関東	0.0318	地域	0.0337
12	来る	0.0263	日本	0.0316	休講	0.0305
13	東京	0.0262	効果	0.0313	怖い	0.0302
14	話題	0.0239	うわさ	0.0283	聞く	0.0300
15	大阪	0.0236	多い	0.0282	効果	0.0297
16	マスコミ	0.0214	休み	0.0262	予防	0.0288
17	対策	0.0212	怖い	0.0257	ウイルス	0.0263
18	住む	0.0188	今	0.0257	大丈夫	0.0254
19	テレビ	0.0186	行く	0.0256	地元	0.0253
20	死ぬ	0.0186	地元	0.0229	大学	0.0250

という言葉は、「実際、大流行していると言われてはいるけど、人口と比較して考えると、そんなに多くはないし、騒ぎすぎだ」という話をしていいる(id=4012)」に示されるように、世間が言う、身近な人がいろいろと言うが、しかしそんなことはないという具合に使われている。またとりたてて「話題」にもなっていないという。

他方、「3.関心がある」ものを特徴づけるのは、「新型」「インフルエンザ」の「感染」が「出る」などである。また、流行地域とされた「大阪」「神戸」「地域」への言及と「ウィルス」に対する「予防」「効果」があるのか「大丈夫

か」という不安である。この中間に位置するグループを特徴づけるのは、「関心がある」グループと一部は共通しつつも、「マスク」の話題であり、「学校」の「休校」「休み」「関東」への波及とか「日本」での流行などが語られる。さらに「うわさ」も登場する。

対応分析による図4をみると、表9とほとんど重複していることがわかる。「3. 関心がある」グループの位置する第1象限では、身近さ、感染のひろがりなどが追加されるだろう。また、中間の「2.まあ関心がある」のグループにつ

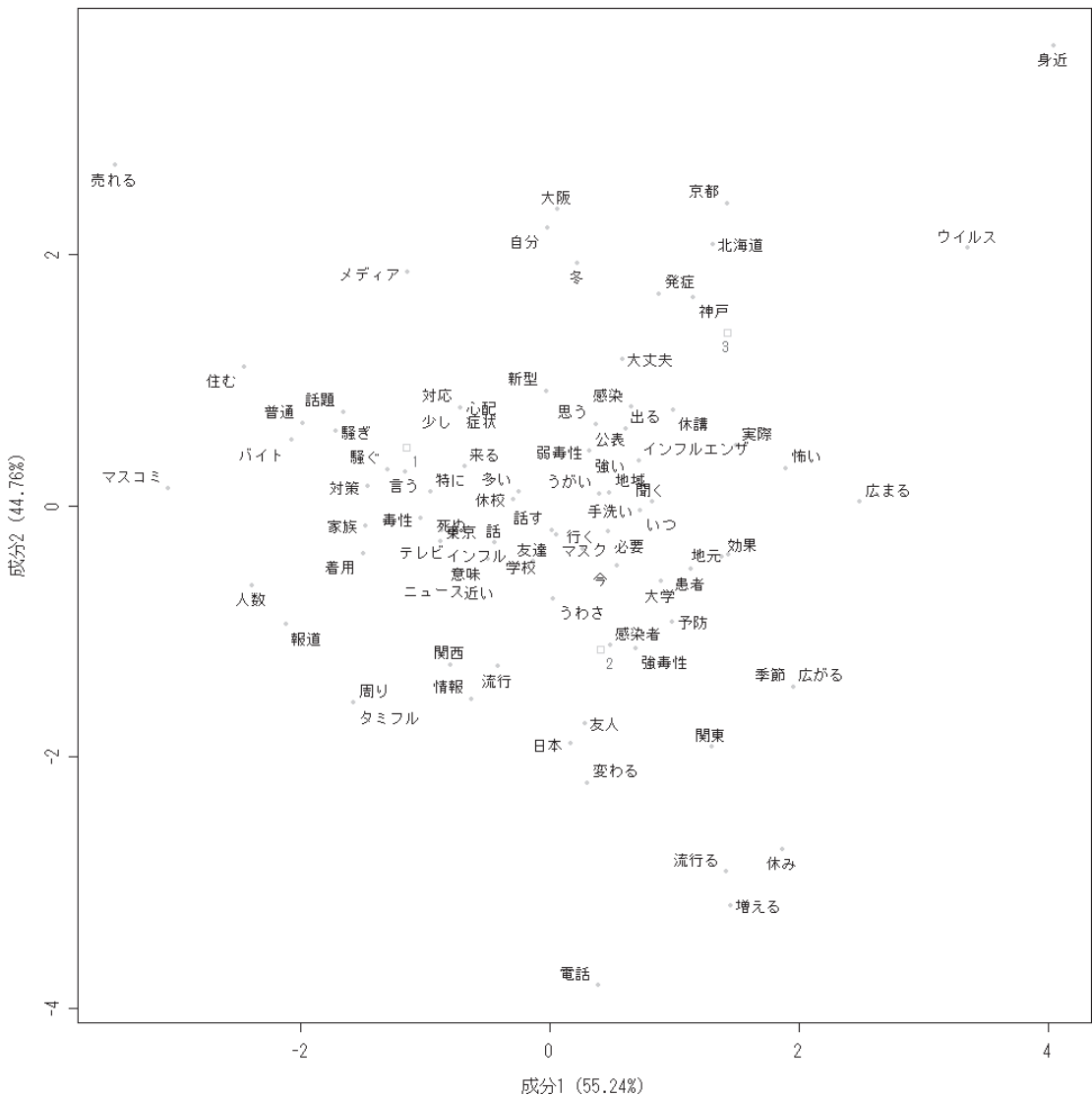


図4 新型インフルの流行への関心による対応分析結果

いては、感染の広がり、季節性インフル、強毒性など病気自身についての話題が多くみられるとともに、地方などの「家族」や友人などの「電話」による問い合わせがあらわれるのである。「1.新型インフル流行に関心がない」については、すでにふれたことのほかに、マスクが「売れる」とか、「バイト」への影響などと関連が深いのである。

3.自分から話題にした人とそうでない人

新型インフルを自分から話題にした人は、分析1の表1に示したように、関西では70%、関東62%、北海道44%と新型インフルの渦中にあった関西、ついで関東が多かった。いずれも3分の2以上が自分から話題にしている。他方、人にマスク着用をすすめた人は関西21%、

関東13%、北海道10%であった。関西でも5人に1人程度であり、関東、北海道では10人に1人程度であった。このように自分から話題にする人は多いけれど、他人にマスクを勧める人は少ないことが分かる。ここでは、新型インフルについて「自分から話題にした人」「人にマスク着用をすすめた人」「いずれもしなかった人」は、どのような話題を語ったのかを分析する。

「1.なにもしなかった人」「2.自分から話題にした人」「3.マスクの着用をすすめた人（自分から話題にした人も一部含む）」のそれぞれの特徴を示したものが表10である。

「1.なにもしない」グループを特徴づける言葉は、「特に」「話題」「うわさ」などと、「メディア」の伝える「ニュース」程度の話題であった。

表10「自分から話題」「マスク着用」を特徴づける抽出語（上位20位）

Q7	1. なにもしない	Jaccard	2. 自分から話題	Jaccard	3. マスク勧める	Jaccard
1	特に	0.0827	マスク	0.1667	マスク	0.1057
2	うわさ	0.0406	インフルエンザ	0.0888	感染	0.0995
3	話題	0.0262	話	0.0865	インフルエンザ	0.0708
4	実際	0.0226	感染者	0.0757	感染者	0.0585
5	メディア	0.0224	休校	0.0679	出る	0.0579
6	ニュース	0.0224	出る	0.0675	神戸	0.0491
7	普通	0.0221	騒ぐ	0.0660	インフル	0.0447
8	来る	0.0220	新型	0.0616	自分	0.0412
9	行く	0.0220	思う	0.0523	大丈夫	0.0373
10	大阪	0.0220	話す	0.0473	大阪	0.0364
11	情報	0.0187	学校	0.0442	予防	0.0347
12	関西	0.0187	意味	0.0400	地域	0.0345
13	関東	0.0185	言う	0.0399	流行	0.0341
14	友達	0.0185	地域	0.0382	発症	0.0318
15	程度	0.0153	流行	0.0380	東京	0.0299
16	京都	0.0152	聞く	0.0367	出かける	0.0261
17	バイト	0.0152	多い	0.0343	強い	0.0258
18	近い	0.0152	騒ぎ	0.0343	強毒性	0.0253
19	水際	0.0115	予防	0.0341	手洗い	0.0245
20	見る	0.0115	今	0.0326	対策	0.0245

「大阪」「関西」「関東」「京都」など多様な地域の「情報」についても言及している。このグループは、このように特に話題にしなかった。してもうわさ程度であったこと、さらにメディアの情報、ニュースを話題にしていることがわかる。

「2. 新型インフルを自分から話題した」人は、「マスク」の「意味」が話題になり、身近な「学校」「休校」などの話題があったと推測できる。また「話」「騒ぐ」「話す」「思う」「言う」「聞く」などコミュニケーションに関する言葉が多く登場する。

最後に「3. 人にマスク着用をすすめた人（一部話題にした人も含む）」を特徴づける言葉

は、「マスク」の着用など「予防」法について、「神戸」「大阪」などの「流行」「地域」についてであり、「強毒性」「発症」「強い」「対応」「手洗い」「対策」など新型インフルの脅威に関連する言葉によって特徴づけられる。

対応分析の結果を図5に示す。「1. なにもしないグループ」は、グラフの上部に位置する。上の分析と同様な言葉が位置することがわかる。また「2. 自分から進んで話題にした」グループは、左下の第3象限に位置する。また「3. マスクの着用をすすめた」グループは右下の第4象限に位置する。第2軸のプラス側は何もし

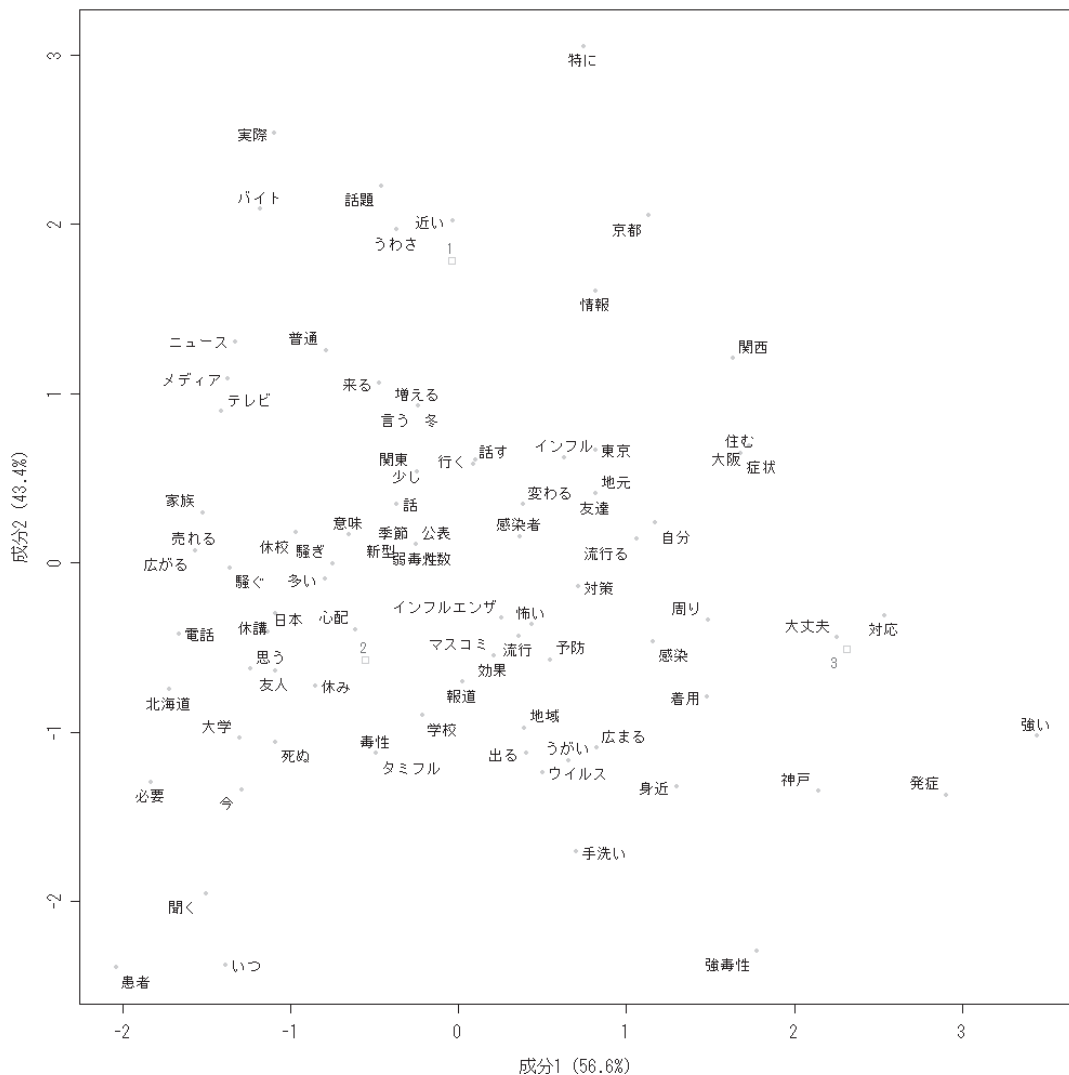


図5 「自分から話題」「マスクの着用」による対応分析結果

ない人、マイナス側は、なんらかの対応を他人にした人の特徴を示している。

4. マスメディアの報道についての評価

今回の新型インフルが当初の想定と大きく異なり、強毒性の新型インフルでないことが判明している執筆時(2009年12月)の現在から当時の報道を振り返ってみると、報道はもちろんのこと、関係機関の対応も「騒ぎすぎ」であるとの印象をぬぐいさることはできないだろう。もっともこれはわが国だけのことでなくて、世界的な規模において「騒ぎすぎ」であったと今でこそ言える。しかし、調査時点でも、メディア報道について騒ぎすぎという反応は多かった。ここでは、メディア報道について騒ぎすぎであったと思うかどうかの結果から、「1.騒ぎすぎとは思わない」「2.まあ騒ぎすぎ」「3.騒ぎすぎである」に三分類し対応分析を行った。地域との関係を図6に示す。おもしろいことに、「騒ぎすぎとは思わない」もの(実際には、「そう思わない」「あまりそう思わない」「どちらともいえない」の合計である)北海道が46%と関東37%、流行地域である関西では29%ともっとも少ないのである。関西地区は、まさに報道される中心にあたるので、メディア報道に対して、このような態度がしめされたものと考えられる。他方北海道においては、メディア報道をそれほど騒ぎす

ぎとは考えていないようである。しかし、それでも過半数はメディアを騒ぎすぎと考えている。

では、各群を特徴づける抽出語を表11に示す。「騒ぎすぎと思わない」と回答したものを特徴づける抽出語は、「マスク」「話」「うわさ」などであり、「大阪」「地域」「北海道」「関東」「地元」「神戸」など地域に関する話題が多い。同時に、「怖い」「死ぬ」などの反応もある。すでにみたように、北海道では、「さわぎすぎでない」と考えるものが多く、新型インフルに対して未知であるがゆえに、メディア報道を騒ぎすぎと考えていないようである。

「まあ騒ぎすぎ」とするものは、実際の対応策への言及が多い。「手洗い」「うがい」「症状」などまた「感染者」「流行」などとも関連が強い。他方、「騒ぎすぎ」を特徴づけるのは、わかりやすく「騒ぐ」「騒ぎ」「メディア」「効果」「マスコミ」「テレビ」「話題」であり、また「話す」「言う」「思う」などであった。

対応分析による結果を図7に示す。第1軸プラス側に「3.騒ぎすぎである」とするグループが位置し、上に述べたように、マスメディアの報道の過剰と日本中が新型インフルで騒ぎすぎていることをしめす言葉が位置している。「2.ややさわぎすぎ」とするものは、大学の休校や新型インフルの毒性や症状についての言及、タミフルの効果や手洗いなどの対処法に言及し

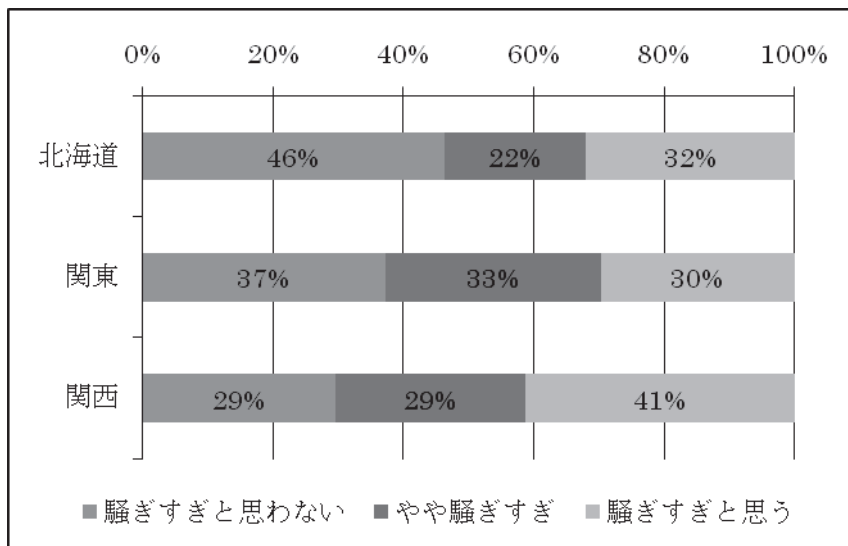


図6 地域別の「メディアは騒ぎすぎだと思う」の割合

ている。「1.さわぎすぎではない」とするグループは、第2象限に位置しており、メディアを通して情報を手に入れているのだろうか、新型インフルが「強く」「毒性」「地元」でも「広まる」のではないかという不安が表現されている。北海道も左上に位置する。

以上、「あなたは、新型インフル（の流行）について友人など身近な人とどのような話やうわさをしていますか。その内容をできるだけ詳しく書いてください」という問に対する自由記述によるデータの分析である。大量のテキストデータから、マクロな傾向をとらえるための手法として近年発達してきたテキストマイニングによる分析であった。これまでに行われてきた分析方法ならば、文章群から典型的な回答を主観的に抽出し話題の特徴を整理、分類して述べるものであった。それに対して、本分析は、テ

キスト化された文章を、あたかも量的なデータを扱うかのように処理する中から、出現頻度の高い語、あるいは、ひとつの文に同時に共起する割合の高い語、さらには、発言者の基本属性との関係別に特徴のある語の抽出などを行ったわけである。そのような分析によって、大量のテキストがおりなす新型インフルについての語りの空間を量的にその特徴をとらえ、結果を視覚的に表現したわけである。

一つひとつの文章から話題の特徴をとらえ、それらを整理・分類することで全体像を抽出するという基本的な手法による分析は稿をあらためて実施し報告したいと思う。

おわりに

本研究は、2009年5月に突然日本を襲った新型インフルが関西地方を中心に急激に流行し、

表11「メディア報道への態度」を特徴づける抽出語（上位20位）

Q10	1. 騒ぎすぎでない	Jaccard	2. まあ騒ぎすぎ	Jaccard	3. 騒ぎすぎ	Jaccard
1	マスク	0.1332	マスク	0.1289	騒ぐ	0.0950
2	話	0.0782	インフルエンザ	0.0942	感染	0.0707
3	感染者	0.0653	感染者	0.0828	思う	0.0621
4	特に	0.0509	休校	0.0732	新型	0.0571
5	新型	0.0472	話	0.0730	言う	0.0531
6	インフル	0.0392	出る	0.0687	騒ぎ	0.0512
7	うわさ	0.0375	話す	0.0483	話す	0.0486
8	予防	0.0369	特に	0.0448	意味	0.0471
9	来る	0.0313	流行	0.0429	学校	0.0379
10	大阪	0.0313	インフル	0.0421	メディア	0.0367
11	自分	0.0308	言う	0.0352	日本	0.0363
12	地域	0.0305	手洗い	0.0336	多い	0.0356
13	北海道	0.0289	今	0.0332	地域	0.0322
14	関東	0.0284	うがい	0.0296	普通	0.0301
15	地元	0.0252	症状	0.0265	効果	0.0298
16	怖い	0.0250	大学	0.0256	マスコミ	0.0276
17	効果	0.0248	神戸	0.0255	テレビ	0.0274
18	死ぬ	0.0222	聞く	0.0255	話題	0.0273
19	ニュース	0.0221	住む	0.0226	東京	0.0268
20	神戸	0.0217	大丈夫	0.0221	実際	0.0244

関東にもいつ飛び火するかという緊迫した状況下で実施されたものである。調査対象となる大学がいつ休校になるかかもしれず、また事態が大きく変化してしまうかもしれない状況なので、調査項目を十分に検討する時間もないままに実施することになった。そのため調査しておくべき事柄を抜かしたり、調査項目として不十分なものもいくつかあった。しかし、「新型インフル」という私たちの生存を根本から脅かす高い可能性を持つ感染症の流行に直面した、まさにその時期に、流行の中心にある地域と、確実に流行が襲うことが予期されている地域と、かなり

隔離された地域で同時期に新型インフルに関する調査を行えたことは意義のあることだと考える。

「新型インフル」に関しては、WHOをはじめとし政府機関やメディアが、こぞって、その感染力の強さ、致死率の高さを宣伝しており、私たちの持つ恐怖感、不安感是非常に高い状態にあったのは事実である。そのような状況下において、私たちがどのように「新型インフル」について語るかはたいへん興味のある事態であった。幸いなことに今回の新型インフルが想定されていたものと違って季節性インフルと大差がなく、想定されていたような死者もでなかった

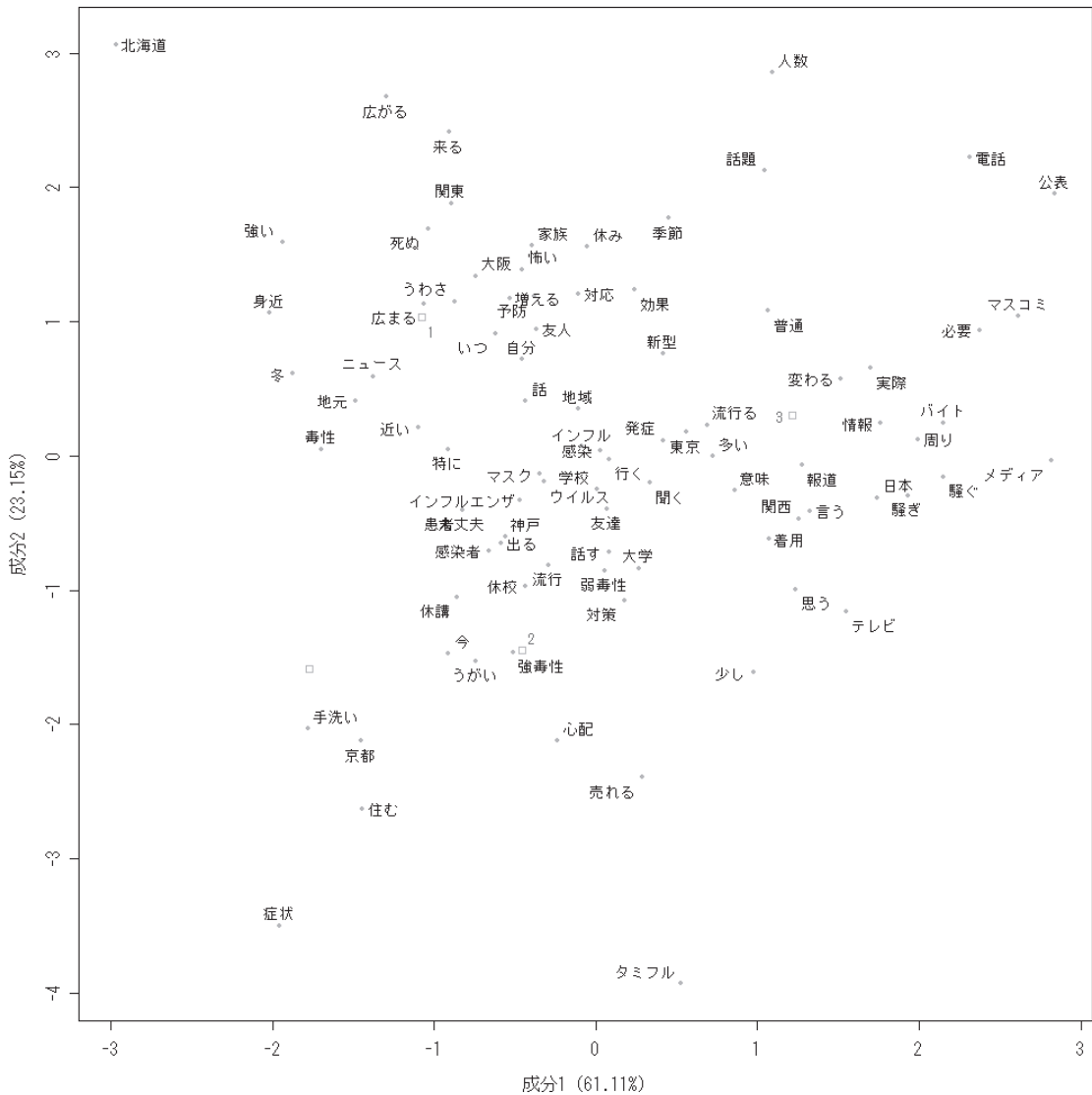


図7 「メディア報道への態度」による対応分析結果

ので、社会的に大きな影響を与える「流言」の発生はみられなかったが、もしも想定通りに悲惨な被害を発生させていたならば、社会的な混乱に結びつく流言は確実に発生していたと考えられるのであった。そのような意味でも、本研究のデータは学術的に非常に価値のあるものであったと確信している。

注

注1. 表12は、A WHO Guidance Document (2009)である。PHASE 6までを示した。この後の段階として "POST-PEAK PERIOD", "POSSIBLE NEW WAVE", "POST-PANDEMIC" が示されているが省略した。

注2. 表13は、聞蔵II ビジュアル (朝日新聞記

事データベース) による「新型インフル」を見出しに用いている記事数である。対象としたのは、本紙、東京の朝刊・夕刊である。

1月から4月まで、10件以下であったが、調査期間の5月は681件と異常に突出していることがわかる。参考までに、2002年は2件、2003年は1件、2004年は4件、2005年は22件、2006年17件、2007年21件、2008年は56件と2009年に向かって徐々に「新型インフル」に社会的な注目が集まっていったことが分かる。

注3. 「うわさとニュースの研究会」は、1992年から1995年にかけて13種類のニュースについて、ニュースの伝播研究を実施している。最近では、携帯電話の急速な普及によるニュースの伝播状況の変容をとらえるために、「オバマ

表12 パンデミックへの6段階

PHASE 1	No animal influenza virus circulating among animals has been reported to cause infection in humans.
PHASE 2	An animal influenza virus circulating in domesticated or wild animals is known to have caused infection in humans and is therefore considered a specific potential pandemic threat.
PHASE 3	An animal or human-animal influenza * reassortant virus has caused sporadic cases or small clusters of disease in people, but has not resulted in human-to-human transmission sufficient to sustain community-level outbreaks.
PHASE 4	Human-to-human transmission (H2H) of an animal or human-animal influenza reassortant virus able to sustain community-level outbreaks has been verified.
PHASE 5	The same identified virus has caused sustained community level outbreaks in two or more countries in one WHO region.
PHASE 6	In addition to the criteria defined in Phase 5, the same virus has caused sustained community level outbreaks in at least one other country in another WHO region.

* reassortant virus 合併結合変異ウイルス

表13 「新型インフル」記事数の推移

1月	4件	5月	681件	9月	168件
2月	9件	6月	222件	10月	148件
3月	6件	7月	97件	11月	111件
4月	9件	8月	146件	12月	31件

当選のニュース(2008/11/5)」（川浦康至・川上善郎2009）、「秋葉原無差別殺人事件ニュース(2008/6/8)」（川浦康至）についてニュース伝播研究を実施している。

注4. 2007年4月感染症のひとつである「はしか」が若年者を中心に広範囲に発生した。「はしか」は、多数の大学を休校に追い込んだ。はやばやと4月に休校をきめた大学がある一方で、「はしか」患者が多数でたにもかかわらず休校を選択しない大学もあった。季節外れの感染症であり、成人になってからの「はしか」は重大な後遺症に結びつくときれ、多くの学生が「はしか」にたいする不安を強く感じていた。「うわさとニュースの研究会」（川上、2007）は、「はしかの流行とうわさ調査」を首都圏の大学13校、1100人以上について「はしか」と「はしか休校」にかかわる話題がどのように広がっているか質問紙調査によって行った。

注5. 分析1については川浦康至が主に担当し、分析2は川上善郎が主に担当した。

注6. 複合語の検出を実施すると、KH Coder内では「感染」と「者」と認識されるものが、「感染者」という複合語である可能性を示し、「感染者」の出現頻度を表示してくれる。もしも、「感染者」と一語で処理したい場合には「タグ」として登録するか、辞書に登録することが必要になる。

注7. 「抽出語リスト」コマンドは、品詞別、出現回数順リストの出力コマンドである。ここでいう品詞とは、HTMLタグをのぞき22に分類される。くわしくは樋口（2008）を参照のこと。

注8. 「未記入」はタグとして登録後、使用しない語とし、分析からは排除した。

注9. 品詞の分類に名詞Cという分類がある。これは漢字一文字の名詞で定義されるものである。実際の分析では、もちいられた品詞をすべて用いて分析を行うわけではなく、分析に必要な品詞のみを利用する。品詞Cは分析にもちいなかったが、「気にしない」とか「気にする」という用語を拾いたい。そこで、「気」をタグに登録すればよいのだが、そうすると「空気」などの単語が「空」と「気」に分解されてしまう。そこで、あえて「気に」と登録したのである。

注10. () 内に示したidは個票につけた番号である。

参考・引用文献

川浦康至「秋葉原無差別殺傷事件ニュース伝播に関する学生調査」コミュニケーション科学, 29, pp.191-210, 2009

川浦康至、川上善郎「オバマ当選ニュース伝播に関する学生調査」コミュニケーション科学, 30, pp.47-65, 2009

川上善郎「はしかの流行とうわさ調査—願望流言の実現するとき」報告書、うわさとニュースの研究会, 2007

樋口耕一「KH Coder 2.xリファレンス・マニュアル」〈<http://khc.sourceforge.net/>〉, 2008

滋賀県健康福祉部「滋賀の健康・栄養マップ」調査報告書〈<http://www.pref.shiga.jp/e/kenko-t/eiyo/eiyo-map12/11.html>〉, 2001

Tannen, D. "Talking from 9 to 5." William Morrow. 1994. 田丸美寿々・金子一雄(訳)「どうして男は、そんな言い方 なんて女は、あんな話し方」講談社, 2001

上田秀樹・小島きょうこ・山本早紀子「健康及び食意識に関連する要因分析」大阪樟蔭女子大学学芸学部論集, 45, pp.63-74, 2008

WHO "Pandemic Influenza Preparedness and Response", A WHO Guidance Document, 2009

謝辞

調査の実施にあたって、以下の方々のお世話になった。記して感謝したい。五十嵐 祐さん（北海学園大学）、金政祐司さん（大阪人間科学大学）、川名好裕さん（川村学園女子大学）、木村昌紀さん（神戸学院大学）、小林知博さん（神戸女学院大学）、杉森伸吉さん（東京学芸大学）、大坊郁夫さん（大阪大学）、三浦麻子さん（関西学院大学）、森尾博昭さん（札幌大学）。

付録：調査票と単純集計(N=898)

問1 あなたは、新型インフルの流行にどの程度関心がありますか。以下の5段階で最も近い数字を一つ選んで、○を付けてください。

	北海道	関東	関西	全体	
1 関心がない	16	16	27	59	6.6%
2	26	35	50	111	12.4%
3	26	69	105	200	22.3%
4	41	103	196	340	37.9%
5 関心がある	40	47	99	186	20.7%
不明・無回答	—	—	2	2	0.2%
全体	149	270	479	898	100.0%
平均	3.42	3.48	3.61	3.54	ns
標準偏差	1.337	1.103	1.098	1.144	

問2 あなたは、これまでに新型インフルの予防策として、どんなことをしましたか。実際によくしたことを選んでください（複数可）。

	北海道	関東	関西	全体	
1 手洗い・うがいをする	72	197	348	617	68.7%
2 十分な睡眠・食事をとる	24	34	74	132	14.7%
3 人ごみに出かけない	14	19	164	197	21.9%
4 マスクをする	13	65	279	357	39.8%
5 感染地域に出かけない	17	42	71	130	14.5%
6 予防策は何もしていない	59	62	61	182	20.3%
7 その他(具体的に教えてください→)	3	4	9	16	1.8%
全体	149	270	479	898	100.0%

問3 あなたは、自分が新型インフルに感染する可能性はどの程度あると思いますか（最も近い数字に○）。

	北海道	関東	関西	全体	
1 可能性はない	23	26	55	104	11.6%
2	41	81	113	235	26.2%
3	42	95	146	283	31.5%
4	30	49	118	197	21.9%
5 可能性がある	13	18	47	78	8.7%
不明・無回答	—	1	—	1	0.1%
全体	149	270	479	898	100.0%
平均	2.79	2.82	2.98	2.90	ns
標準偏差	1.187	1.053	1.156	1.133	

問4 あなたは新型インフルの症状について、どの程度知識がありますか（最も近い数字に○）。

	北海道	関東	関西	全体	
1 ない	18	15	15	48	5.3%
2	42	75	95	212	23.6%
3	47	118	182	347	38.6%
4	35	57	160	252	28.1%
5 ある	7	3	25	35	3.9%
不明・無回答	—	2	2	4	0.4%
全体	149	270	479	898	100.0%
平均	2.81	2.84	3.18	3.02	p=.000 北海道<関西、関東<関西
標準偏差	1.076	0.860	0.917	0.944	

問5 あなたが新型インフルに関する情報入手経路として、よく利用したものはどれですか（複数可）。

	北海道	関東	関西	全体	
1 マスメディア（テレビや新聞）	137	257	443	837	93.2%
2 インターネット（ポータルサイト）	41	75	159	275	30.6%
3 インターネット（医療情報のサイト）	24	23	56	103	11.5%
4 家族や友人など身近な人	28	104	188	320	35.6%
5 情報入手していない	7	6	6	19	2.1%
6 その他（具体的に→	5	2	13	20	2.2%
全体	149	270	479	898	100.0%

問6 あなたが新型インフルに関する情報源として信頼するものはどれですか（複数可）。

	北海道	関東	関西	全体	
1 国の発表	63	154	218	435	48.4%
2 国際機関（WHO）の発表	60	170	249	479	53.3%
3 地方自治体の発表	20	40	80	140	15.6%
4 医師や専門家の発言	86	149	290	525	58.5%
5 友人や家族など身近な人の話	18	37	75	130	14.5%
6 その他（具体的に→	6	6	23	35	3.9%
全体	149	270	479	898	100.0%

問7 あなたは、新型インフルに関して、以下のようなことをしましたか（複数可）。

	北海道	関東	関西	全体	
1 人に予防策を勧める	15	35	101	151	16.8%
2 自分から話の話題にする	66	168	333	567	63.1%
全体	149	270	479	898	100.0%

問8 あなたは、国内で新型インフルに感染した人は実際どのくらいいると思いますか（最も近いものに○）。

	北海道	関東	関西	全体	
1（確認）公表されている人数	34	62	71	167	18.6%
2 公表人数の2倍程度	46	92	165	303	33.7%
3 公表人数の3倍程度	31	54	109	194	21.6%
4 公表人数の4倍程度	5	9	14	28	3.1%
5 公表人数の5倍程度以上	11	17	66	94	10.5%
6 わからない	21	36	54	111	12.4%
不明・無回答	1	—	—	1	0.1%
全体	149	270	479	898	100.0%

問9 あなたは、国内の新型インフルが沈静化するのはいつごろだと思いますか（最も近いものに○）。

	北海道	関東	関西	全体	
1 1ヵ月後（6月下旬）	27	84	178	289	32.2%
2 2ヵ月後（7月下旬）	45	81	131	257	28.6%
3 3ヵ月後（8月下旬）	29	33	60	122	13.6%
4 4ヵ月後（9月下旬）	5	13	12	30	3.3%
5 5ヵ月後（10月下旬）	5	10	11	26	2.9%
6 6ヶ月以降（11月下旬～）	9	9	20	38	4.2%
7 わからない	28	40	67	135	15.0%
不明・無回答	1	—	—	1	0.1%
全体	149	270	479	898	100.0%

問10 あなたは、新型インフルに関する新聞やテレビの報道を騒ぎすぎと思いますか（最も近い数字に○）。

	北海道	関東	関西	全体	
1 そう思わない	25	18	26	69	7.7%
2	20	33	39	92	10.2%
3	23	49	76	148	16.5%
4	32	89	140	261	29.1%
5 そう思う	47	80	197	324	36.1%
不明・無回答	2	1	1	4	0.4%
全体	149	270	479	898	100.0%
平均	3.40	3.67	3.93	3.76	p=.000 北海道<関西、関東<関西
標準偏差	1.488	1.212	1.177	1.258	

問11 あなたは、新型インフルも含め、以下のことがらがどの程度恐ろしいですか。それぞれについて、最も近い数字に○を付けてください。

	恐ろしくない			恐ろしい		不明・ 無回答	平均	標準偏差
	1	2	3	4	5			
1 新型インフルの流行	72	164	224	297	141	—	3.30	1.172
2 原発の放射能漏れ事故	14	24	78	211	570	1	4.45	0.877
3 農薬残留食品	23	53	153	362	305	2	3.97	0.990
4 エイズの感染	22	42	125	249	459	1	4.21	1.009
5 受動喫煙による肺がん	42	105	189	295	265	2	3.71	1.147

問12 新型インフルについて、さまざまな意見があります。以下のことがらについて、あなたはどのように思いますか。それぞれについて、最も近い数字に○を付けてください。

	そう思わない			そう思う		不明・ 無回答	平均	標準偏差
	1	2	3	4	5			
1 新型インフルについてはわからないことがとても多い	39	148	302	304	104	1	3.32	1.020
2 新型インフルが大阪と神戸だけで流行するのは不思議だ	120	173	171	247	186	1	3.23	1.335
3 近いうちに東京でも新型インフルが大流行する	29	99	209	295	265	1	3.74	1.094
4 新型インフルは近いうちに強毒性に変わる	157	244	323	120	49	5	2.62	1.089
5 新型インフルの水際作戦は意味がない	102	192	282	172	148	2	3.08	1.232
6 大学の臨時休校はあわてすぎである	150	261	204	145	138	—	2.84	1.309
7 関東でも新型インフルの患者がいるのに公表していない	105	174	308	186	122	3	3.05	1.190
8 新型インフルにはマスクは効果がない	157	223	235	177	105	1	2.83	1.260
9 国は新型インフルに関する情報を操作している	108	196	343	166	80	5	2.90	1.113
10 今の抗インフル薬は新型インフルにも効果がある	57	148	374	229	88	2	3.16	1.022

問13 あなたは、新型インフル（の流行）について、どんなことを知りたいですか、どんなことが気になりますか。その内容をできるだけ詳しく書いてください。

(省略)

問14 あなたは、新型インフル（の流行）について友人など身近な人とどのような話やうわさをしていますか。その内容をできるだけ詳しく書いてください。

(省略)

●最後に、あなたご自身のことをおたずねします。

F1 あなたは、これまでにインフルエンザにかかったことがありますか。

	北海道	関東	関西	全体	
1 かかったことはない	54	82	141	277	30.8%
2 かかったことがある	86	162	286	534	59.5%
3 わからない	9	23	45	77	8.6%
4 その他（具体的に→ 不明・無回答	0	0	2	2	0.2%
	—	3	5	8	0.9%
全体	149	270	479	898	100.0%

F2 性別

	北海道	関東	関西	全体	
1 男性	107	76	192	375	41.8%
2 女性	42	194	287	523	58.2%
全体	149	270	479	898	100.0%

F3 年齢 平均 20.3歳 標準偏差 2.88歳

F4 学年

	北海道	関東	関西	全体	
1 1年生	10	126	60	196	21.8%
2 2年生	61	78	111	250	27.8%
3 3年生	51	40	202	293	32.6%
4 4年生	27	26	70	123	13.7%
5 大学院生	0	0	36	36	4.0%
全体	149	270	479	898	100.0%

F5 通学

	北海道	関東	関西	全体	
1 自宅	100	182	330	612	68.2%
2 自宅外	49	85	147	281	31.3%
不明・無回答	—	3	2	5	0.6%
全体	149	270	479	898	100.0%

F6 平日一日あたりのテレビ視聴時間

	北海道	関東	関西	全体	
1 30分未満	22	36	65	123	13.7%
2 1時間未満	27	60	91	178	19.8%
3 2時間未満	38	85	148	271	30.2%
4 3時間未満	28	58	98	184	20.5%
5 3時間以上	34	31	77	142	15.8%
全体	149	270	479	898	100.0%

F7 平日一日あたりのインターネット利用時間（メール以外）

	北海道	関東	関西	全体	
1 30分未満	36	62	118	216	24.1%
2 1時間未満	34	86	115	235	26.2%
3 2時間未満	25	61	104	190	21.2%
4 3時間未満	29	31	65	125	13.9%
5 3時間以上	25	29	73	127	14.1%
不明・無回答	—	1	4	5	0.6%
全体	149	270	479	898	100.0%